

開会挨拶

時任 宣博（京都大学理事・副学長）



皆さま、おはようございます。京都大学で研究・評価担当の理事、副学長をしております時任でございます。第18回京都大学附置研究所センターシンポジウムの開催にあたりまして、ひと言ご挨拶申し上げます。

ご承知のとおり、新型コロナウイルス感染症によるパンデミックは、既に4年目に突入しておりますが、現在は、これまで蓄えた知識や経験を活かして、以前にも増して活力あるアフターコロナの社会を目指す時期であると考えております。そのような時期に、ここ新潟の地で、第18回の京都大学附置研究所・センターシンポジウムを開催させていただくことは、大変意義深く、また喜ばしく思っております。開催にご協力いただきました新潟県教育委員会および新潟市教育委員会はじめ、地元関係者の皆さまに、心より感謝申し上げます。

パンデミックの間、私たち大学におきましても、数々の困難に直面し、経験を積んでまいりました。その一方で、これまで見過ごされておりました価値観や、ものの見方に改めて気付かされる時期であったと思います。オンラインの利便性が飛躍的に拡大し、浸透致しました。また、対面で向き合うことが非常に大事だということを実感した次第でございます。このシンポジウムは、その両方の観点を取り入れたハイブリッドの形で開催させていただきました。感染防止には十分気を付けた上で開催しております。その過程では、多様な個人の環境、いろいろな考えの方がおられますから、そういうものに配慮する大切さも理解してきたつもりでございます。このシンポジウムのサブタイトルに「多様性」という言葉がありますが、そういういろいろな生き方、考え方があることも実感した次第です。

この「多様性」は、英語でDiversityと言われますが、現代社会においてますます重要になる概念だと思えます。私たちが関わる研究の世界でも、多様性を非常に重視した動きが強まっております。元来、研究の対象となるものは、自然現象であれ社会現象であれ、興味深い対象は個人いろいろですから多数にあるわけです。それを解き明かせば、さらにその先に不思議な地平が広がるかたちで、いろいろな取り組み方があると思えます。

最近、結果至上主義や功績主義が横行しているようにも見えますが、成果が確実に予測される研究だけが重要というわけではありません。国の政策に選択と集中という言葉もありますが、京都大学では、それぞれの興味に基づいた独自の研究を進めているところでございます。研究を多様化することは、今後の社会を考えると非常に重要な観点だろうと思っております。いろいろな視点で研究を続けることで、創造につながる新たな発展が生み出せるのではないかと考えております。

今回のシンポジウムでは、京都大学で行われている研究の多様性に焦点を当てまして、多様性が持つ意義、魅力を伝えられたらと思えます。本学の附置研究所・センターは20近くありますので、時間の関係で全ての多様性をお示しすることはできませんが、本日ご登壇いただく先生方に、ぜひ京都大学の魅力を伝えていただきたいと思っております。

今回のテーマの大半の部分は生命にまつわるものが多いと、先ほどのプログラムの紹介でもありましたが、研究の起点となる興味、着想の多様性、研究のやり方、手段、そういうものもお楽しみいただけたいと思います。

今回はタンパク質の構造、細胞機能、動物生態、人間の精神など、いろいろな視点からお話があると伺っております。解明を目指している生命の本質が明らかになれば、また新しい研究につながっていくものと考えております。多様性といっても、人と違うことをすればいいというだけではないので、それが偶然のきっかけや個人の視点から始まったものであっても、最終的には、真理探求に合理性があって創造性につながる、そういうことでアカデミアでの研究が成り立っているとご理解いただければと思います。

京都大学は、研究総合大学と位置付けられていると自覚しておりますけれども、その中では、常に独創性が重視、追求されております。それを培うために中心的な役割を担っているのが、本学の多様な附置研究所・センター群でございます。この附置研究所・センターでは、従来の学問体系にとらわれずに、学問分野の垣根を越えた自由な発想の下に、未来を切り開く多様な先端的な研究が行われております。本日の講演では6人の先生にお話しいただきますが、それを踏まえて、最後のパネルディスカッションでは、多様であることの意義、生態系の多様性も含めての人間社会の多様性、いろいろな観点からのディスカッションができればと思っております。

先ほど、「本シンポジウムは政令指定都市を回った後、地方中核都市を回っている」とご紹介がありましたが、このシンポジウムを新潟県で開催させていただくことについて、少し振り返ってみます。新潟県で思いつきますことは「長岡藩の米百俵の精神」です。このような学問を大事にする土壌がある、教育に力を注いでおられる県でございまして、人材も多数輩出されておられます。

京都大学でも、多くの新潟県出身の方が学ばれています。その中でも、我々の大先輩ですが、京都大学の第16代総長・平澤興（ひらさわ こう）先生が新潟県南区のご出身と伺っております。京都帝国大学時代の先生ですが、医学部で学ばれて、世界的な脳神経解剖学者として活躍された方です。教育者としても非常に広く世に知られた方で、名言も多数残されていますが、お言葉の中に、「およそ世の中に目がさめたことも、無事に太陽が昇ったことも、今無事に心臓が動き、やすらかに呼吸していることなども、一見平凡ではありますが、実はいまだに完全には解き明かすことのできぬ不思議がその奥にあります。」と書かれております。皆さんが当たり前のように感じている中にも、まだ未解明の不思議があるということです。

私たち京都大学の後輩も、多様な学問分野で、それぞれの興味に基づいて、この未解明の学理を追求していきたいと考えております。本日、この新潟の地で京都大学附置研究所・センターシンポジウムが、ご参加の皆さま、また、オンラインでご視聴の皆さまとともに、この奥にある不思議を理解する一助になればと考えております。

これもちまして私の開会のご挨拶といたします。どうか、1日ですけれども、お楽しみいただければと思います。ありがとうございました。